

Mikula Chic

あだ花

Op.5

'A Chloris'

作曲 レイナルド・アーン
Reynaldo Hahn 1875-1947 1916年頃

— 創作日本語歌詞による —
2021年12月20日 β3版

ゆめ
夢をみた みたい
ひとり 目^めを清^すませば
いまでも 聞^きこえるの
あ^{ひと}の人の 笑^{わら}う聲^{こえ}

はな
華^{はな}やいだ 春^{はる}
ほしめぐ 星^{ほし}廻^{めぐ}る 季^き節^{せつ}
不^ふ意^いに 消^きえてった

つめ
冷^{つめ}たい 雪^{ゆき}の華^{はな}
だれ^{だれ}が流^{なが}す 涙^{なみだ}雨^{あめ} 凍^{こお}る雫^{しずく}

かじかむ 指^{ゆび}先^{さき}の
ふる 顫^{ふる}える おもいに
寄^より添^そって いけるなら

◎制作ノート

室内楽コンサートなどのプログラムでアンコールとして採り上げられることも多いこの曲は、当初、岡倉天心の『茶の本』の第六章にある『花』の一節からの創作というプランでスタートした。しかしながら試作は凡庸で訴えるものがなく、これはボツかなと諦めていた師走のはじめ、ふと書棚に目をやった『平家物語』を読みはじめて『殿上闇討』のくだりにある、「雲の上人これを猜み、火のほのぐらき方にむかつて、やはら此刀をぬき出し、鬢にひきあてられけるが、氷なごの様にぞみえける。諸人目をすましけり。(中略)、みなし子にておはしけるを、婿に取って声花にもてなされければ、とぞはやされる」と読んだ途端、このイメージが固まった。

「目を清ます」は(平清盛を意識しつつ)上のような引用から「澄ます」とせず、声花という表現から「笑う声」を導いた。「雪の華」は「雪の花」と同意なわけだが、ここはボードレールの詩集『悪の華』の翻訳をした先人が邦訳タイトルを付けるときに「Les Fleurs du mal」の華の字に多種多様のニュアンスを持たせたかったとかのエピソードを思い出したのが一つ。もう一つは一般的な国語辞書では「花」と「華」を特に区別しないものが多いが、『日本国語大辞典』では色彩の美しいことに加えて、「みえ、虚飾、おごり」の説明をつけてあることによる。ゆえに、最初の華は素直なきらびやかさ、後半は虚しさのニュアンスを込めて、という意図である。

曲の冒頭から最後の最後まで延々と流れる三連符は、空からひらひらと静かに降る雪のイメージから雪国フィンランドの澄み切った響きを持つカンテレを、パッヘルベル(1653-1706)の『カノン』やバッハの『G線上のアリア』の通奏低音に似た音形をもつバスラインは、積もる雪を踏みつけるときにググとかギョッという感じでゆっくり歩く音に似せてコントラバスのピッチカートとした。つい先日、この詩作と入れ替わるように、遠い雪国の屋外で見つかったと伝え聞く一花も、さぞ冷たかっただろう。

初出：令和三年十二月二十日